

シャルル・グノーのカンタータ《ガリア》

—国民音楽協会の外の「アルス・ガリカ」—

安川智子

1871年パリに設立された国民音楽協会は、その標語として「アルス・ガリカ」という言葉を掲げている。この標語はこれまで、「フランスの芸術」を意味すると捉えられ、もっぱらフランス音楽界におけるナショナリズムの表れであるとみなされてきた。しかし、フランス人音楽家を統一させる役割を果たしたこの標語の背景には、より深く複合的な要素がからみあっているように思われる。本論文は、実例として同じ1871年に作曲されたシャルル・グノーのカンタータ《ガリア》を取り上げ、分析することにより、「アルス・ガリカ」とは何であったのかを明らかにすることを目指す。

分析は、「ガリア」という題名と歌詞をめぐる歴史的背景、フランスにおける《ガリア》初期演奏会批評、そして音楽、という三つの視点から行なった。《ガリア》は、1871年のロンドン万博のオープニング・コンサートのために万博委員会から委嘱された作品である。しかしグノーが選んだ題材は、エレミア哀歌であり、そのテキストをもとにグノー自ら歌詞を作り、「ガリア」という題名をつけた。当時のフランスにおける社会事情（普仏戦争の敗北、第一ヴァチカン会議）や、「ガリア」をめぐる歴史記述の変化などを考慮に入れると、すでに題材そのものに、共和制の理念と信仰心の間で揺れるグノーの複雑なアイデンティティが表れている。聖俗の混合という特徴は、旋法と調性の混在として音楽書法にも表れ、またその音楽は、「演奏に適した場所は教会か劇場かコンサートホールか」という視点において、批評家たちを戸惑わせた。このような状況は、対ヨーロッパ諸国のナショナリズムだけでなく、ライシテ時代の「カトリックと世俗主義の混合」というフランス特有の現象があつてこそ生まれるものである。《ガリア》、そして「アルス・ガリカ」は、19世紀フランスにおけるこのような事情が音楽界にも如実に反映されていることを証明している。